

# *Sermo Lupi* に於ける語順の一研究

椿 昇

## 1. 序 論

### 1-1 Late West-Saxon について:

OE 文学の中で、West-Saxon 方言が最も豊富な資料を蔵し、特に元来は West-Saxon 以外の方言で書かれた文学上の作品の多くが Late West-Saxon の写本として現存している。<sup>1</sup>

即ち、筆写の過程に於いて、恐らく West-Saxon の方言をもった書記たちが、テキストの綴りを自分自身の基準に合わせることによって、遂にはそれらが純粹の West-Saxon 方言のテキストになったと推定されている。

斯うして、伝統的に West-Saxon 方言が OE の文法的調査の基準としてみとめられている。<sup>2</sup>

そして、Late West-Saxon 方言は、Ælfric (Grammarian) と Wulfstan の作品の中に最も純粹な形がみられると云われている。本論で *Sermo* をとりあげるのは主としてこのような根拠によるわけである。

扱、Late West-Saxon によって代表される OE 文学の特徴は、それらが MSS に記録されているために、固定的な文法と正書法が欠けていることである。綴りにみられるかなり多くの自由変形 FV は、夫々が近似の形として捉えられることも珍しいことではない。

この多岐にわたる変化と複雑さの中から、Mod. E. の構造に現われるところのカテゴリーに並行するように参照しながら出来る限り明確に OE の分布の形式を描き出したい。そして、最終的には syntax のレベルに於いて OE の構造の体系的な記述を試みようとするわけである。

即ち、OE の syntax のレベルに於ける構造はかなり自由な変異の幅を

もっているが、そのなかで容認されている基本的な変化の幅を捉え、基準的な分布の法則を引出してその構造上の特徴を明らかにすることが本論の第一の目標である。

## 1-2 テキストと作者について：

*Sermo* には5つの MSS が現存しているが、それらのうち I と E の MSS が最も長く、C が中間の長さをもっている。そして、MSS 間の相違はそれら5つの MSS が共通の原本から出発して密接に結びつきながら夫々が独立の異本であることを示していると云われる。

扱、Sweet, H. の *Reader* では、5つの MSS が対校されて一つになっているが、筆者が参照している D. Whitelock のテキストは MS I (British Museum, Cotton Nero Ai, fols 110-15) による。

Whitelock が MS I を選んだのは、I が Wulfstan の原稿に最も近いテキストであるとされ、又 Wulfstan 自身によって校訂されたものであると一般にみとめられているからであろう。

扱、*Sermo* の作者 Lupus が Wulfstan (Bishop of Worcester and Archbishop of York) と同一人であるということは、Wanley 以来殆んど疑義がないとされている。そして、これは Wulfstan が Bishop of London であった当時に宗教上の手紙に Lupus という名前をしばしば用いているということからも理解出来る。

Wulfstan の経歴について、Bishop になる以前の記録は殆んど知られていないが、それについて詮索するのは本論の目的ではないので唯、次の引用によってその人となり想像しよう：*Historia Eliensis* には、「Wulfstan が歴代の王 (Ethelred, Edmund, Cnut) から兄の如く愛され、父の如く尊敬されて、顧問官の最高権威者としてしばしば国家の枢機に参画し、彼らに

神の啓示を語り、一種の精神的支柱となっていた。」とある。

Wulfstan の生涯は、英国史上に於ける波瀾騒擾時代と一致している。Wulfstan が Bishop of London になったのは996年で、すでに980年に侵入し始めたデンマーク人が猖けつを極めた頃である。その後、彼が York (Worcester 兼任) に移ったのは1002年とされているが、その前年1001年には Hampshire, Devon, Somerset がすべて潰滅していた。そして、この homily が始めて作られたのは1014年であるとされている。<sup>3</sup>

この *Sermo* の必要の急は、この文章全体に何よりも力強さと説得力を与えなければならぬという修辭的な工夫によってしのぶことが出来よう。世界の終末の近さと、当時の悪と墮落から、世人を悔心に呼び起すことが焦眉の急であったに違いない。そして、彼の見解によれば、神の怒りは Viking の侵寇という形で示されたものなのである。彼は、神学の問題を論じないし、又、聖書の諷刺的な解説には無縁であり、聖者たちの生活からの神秘的な物語りや出来事による詩的な叙述によって聞き手や読者の興味を引こうとはしない。唯、彼の意図するところは、人々に力強く最も効果的に現状を想起させることにあったと考えられる。

### 1 3 *Sermo* の言語：

この homily が、Wulfstanの著作であるという証拠は第一にその文体的特徴にあるとするならば、あらゆる角度からそれを証明しなければならぬが、本論に入る前に、ここでは特に注意すべき用法を二、三挙げて、その特徴的な文体を考慮してみたい：

- ① *fadian, afyllan, forfaran, forrædan* などの動詞を頻繁にくり返し用いている。
- ② *worold-, peod-* を接頭辞とする複合語を好んで用いている。

- ③ *zebunzan* に直接目的語をとる。
- ④ *deofol* に定冠詞を用いない。
- ⑤ 否定文に *næniʒ* を用いないで, *æniʒ* を用いている。
- ⑥ 強調のために, 余計な語句と思われるものを頻繁に用いる。例えば, *mid ealle, ʒeorne, to wide, ealles to swype, ealles to ʒelome, oft and ʒelome* など。
- ⑦ キマリ文句の *set-phrase* が頻発する。そして, それらが対句をなし, しばしば頭韻と押韻によって結びつけられている: 例えば, *ʒecnawe se pe cunne, swa hit pincan mæʒ, swa swa man scolde / byrsta and bysmara ʒebiden, healdan unwemme and a butan ʒlemme* など。

これらの例によってみられるように, 彼は云はば修辭的的技巧に長けていたと云える。彼は, *metaphor* や *simile* にたよらず又, 詩的想像をさけているようである。

*Wulfstan* の文体に明瞭さと, 力強さを与えるものは文構造そのものであり, それに附随するところの強く変化のあるリズムであるということが出来よう。

次に, *Sermo* のコトバは, 当時の基準的な *WS* の標準語とされているが, その特徴を二, 三挙げてみよう:

- ① *u* の *i-mutation* に *y* を用いる。( *ʒebyreð, fyrðriʒe, unscyld* など)
- ② *ea, io* の *i-mutation* に *y* を用いる。( *ʒehyrað, ʒyman, ʒelyf, ʒelyfað* など)
- ③ *l* + 子音の前の *æ* が *→ea* の形をとる。( *healde, -an, eal* など)

しかし, 又一方, 純粹の *W-S* でないと考えられる特徴もいくつかみられる:

- ① *sc* のあとに back vowel の二重母音化がない。 (*scolde, scoldan*)
- ② *lið, 3efærð* に対して, 3人称現在の短縮されない形がみられる。  
(*3ehyreð, 3ymeð* など)

上に挙げたように, この作品が Late WS の方言であると断定出来ないような偶然的な変形のいくつかが指摘されるけれども, このテキストの校訂者 D. Whitelock に随って, MS I によるこのテキストが Late West Saxon の標準語であると認めて調査を進めたい。

*Colloquy* に次いで, *Sermo* をとり上げる主な理由は: ① 二つの作品が書かれた年代が殆んど同時代であると推定されていること。② *Ælfric* と *Wulfstan* の間には, かなり深い親交があったと考えられていること。——このことは, 両者の往復書簡が現存しているということ, *Wulfstan* の遺言書の中に, *Ælfric* が執行者兼受遺者として出ていること, *Ælfric* の homily のいくつかは *Wulfstan* が彼自身の文体で校訂したとみとめられるものがあると云うことなどから確められる。③ 二つの作品が, 共に Late West-Saxon の標準的な言語であると一般にみとめられていること。

主としてこのような理由によって, 二つの作品が, 相互の比較調査の十分な資料を提供するに違いないと信ずるからである。即ち, *Sermo* を分析して LWS の syntax の資料を得るならば, *Colloquy* のそれと比較検討して——次第に時代をさかのぼり West-Saxon 方言の syntax の体系的な記述を試みる調査に十分な根拠として堪え得る資料が得られると期待するからである。

## 2. 第1文型

### 2-1 S-V型:

- 1) and unrihta to fela riscode on lande

- 2) Ne æniȝ wið operne ȝetrywlice pohte swa rihte swa he scolde
- 3) and unriht rærde and unlaza maneȝe ealles to wide ȝynd ealle pas peode
- 4) hy herȝiað and hy bærnað rypap and reafiað and to scipe lædað

この一節は、S-V/S-V/V/V/V/ と重複して第1文型を示している。ここに現われた5ケの動詞は他動詞として働くべき性質のものであり、この一節の直前に No. 61 and hy us hynað dæȝhwamlice (*and they abase us daily*) の文があるので、むしろ第3文型に組入れたいようであるが、テキストによれば前後が [ ; ] で分離されて全く独立の一節をなしているのです。そのような推測をさしはさまないで、ただあるがままの形態によってこの構文を第1文型に組入れて挙げておくわけである。

- 5) Ne dohte hit nu lanȝe inne ne ute, ac wæs here and hete on ȝewelhwilcan ende oft and ȝelome

文頭の dohte (deah の prt.) は、否定の副詞 Ne との所謂 cohesion の原理によって前転位したものとみとめることが出来る。尚、文中の wæs は copula ではなくて独立の自動詞としてその働きを示していると考えられるのでこの一節は、VS/VS/S と重複することになる。

- 6) and hit æfter pam eft ȝeweorpe pæt wæpnȝewrixl weorðe ȝemæne peȝene and pærele

この一節は、Mod. E. の 'It ~ that ——' の形式の枠を示しているが、

主節にも *that clause* にも第1型式が現われているので, SV [SV] の形になる。

- 7) and næs a fela man pe smeade ymbe pa bote swa georne swa man scolde

文頭の *næs* は, *wæs* に *ad. ne* が結合した形で, 前の No.5 の例文中の *wæs* と同様の働きを示しているので *copula* ではなく完全自動詞とみとめられる。随ってこの一節は VS [SV] の形式を示すことになる。

以下の10例は従節中の発生 [SV] 型:

- 8) Se awrat be heora misdædan
- 9) pe læs we æt<sup>3</sup>ædere ealle for-weorðan
- 10) Swa pæt hy ne scanað ná
- 11) and ælc æfter oðrum, hundum ge-liccast, pe for fylpe ne scrifað
- 12) ... pe us on sittað
- 13) peah hy wel spæcan

この例の中にある *wel* は明らかに副詞であるから, 次の例(14)に於ける *swa* も副詞として理解出来る。又, 事実 *An Anglo-Saxon Dict.* の *swa* の項の IV. *adv.* の用法と一致するとみとめたい。更に, テキストの glossary においても *adv.* として挙げてあるので異論はないかと思う —— 随ってこ

の例を, swa を *n.* として第3型に組入れないで第1型に挙げるわけである。

14) peh man swa ne wene

15) and pæt is 3esyne on pysse peode pæt us 3odes yrre hetelice on sit, 3ecnawe se pe cunne

16) forþam 3odes 3erihhta wanedan to lan3e innan pysse peode on æ3hwylcan ænde, and folclaza wyrseðan ealles to swype

この一節は〔SV/SV〕と重複している。

17) peh hy syn3ian swyðe and wið 3od sylfne forwyrcean hy mide alle

この例は, 〔SV/VS〕を示しているが, 後者の VS は, 恐らく wið 3od sylfne の一句との密接な意味の関聯から V の forwyrcean が前転位したものと考えることが出来る。一種の強調とみて差支えないであろう。

以下の4例は助動詞 v を含む構文:

18) and swa hit sceal nyde for folces synnan ær Antecristes to3yme yfelian swype

19) þonne mote we pæs to 3ode ernian bet þonne we ær pýsan dydan

No.18 は SvV 型を示し, No.19 は vSV 型を示している。後者の v の前転位は *ad. þonne* によって導入された cohesion のための倒置とみとめら



れる。

20) swa hit þincan mæ3

これは一種の挿入句であるが、この一節はテキストの ll. 60, 136, 166 に 3回発生している。〔SVv〕

21) ... hu earmlice hit 3efaren is nu ealle hwile wide 3ynd pas peode

文中の 3efaren は, *faran* (go, happen) の過去分詞形であるから, 助動詞 *is* との periphrasis によって完了時制を現わしている。〔SVv〕

### 3. 第2文型

#### 3-1 S-V-C型:

22) 3eos worold is on ofste

23) An peodwita wæs on Brytta tidum, 3ildas hatte

24) and þy hit is on worolde áá swa len3 swá wyrse

25) and huru hit wyrð þænne e3eslic and 3rimlic wide on worolde

26) eal pæt is 3ode lað, 3elyfe se þe wille

- 27) eal pæt syndan micle and ezeslice dæda, understande se pe wille
- 28) and se byrst wyrð zemæne, peh man swa ne wene, eallre pysse peode, butan 3od beor3e
- 29) and pæt is zesyne on pysse earman for-syn3odan peode
- 30) and pæt is zesyne on pysse peode pæt...

上の二例では Mod. E. の 'It is ~ that ——' の構文のところに, it のかわりに pæt が用いられているが, 次の二例では hit になっている:

- 31) And 3yt hit is mare and eac mæni3-fealdre pæt dereð pysse peode
- 32) Forpam hit is on us eallum swutol and zesene pæt...

但し, 後者の例は従節中の発生である。次の例は上の二つの例と全く同様の構文を示しているが, 主語 hit がなくて, そのかわりに上の例では V (is) の次に位置している副詞句 'on us eallum' と同義であるとみとめられる us (to us, for us) が前位をとっている:

- 33) py us is pearf micel pæt we us bepencan and wið 3od sylfne pin3ian 3eorne

尚, 次の例の us も類似の用法を示しているとみとめられよう:

34) Ful earhlice laza and scandlice nydzyld purh 3odes yrre us syn zemæne, understande se pe cunne

35) and la, hwæt is æni3 oðer on eallum pam 3elimpum butan 3odes yrre ofer pas peode swutol and 3esæne ?

この例において、hwæt と æni3 oðer のいずれが主語であるか簡単に決定することは出来ないが、æni3 oðer は hwæt を修飾する形容詞句とみとめ、on eallum pam 3elimpum の副詞句を C の要素としたい。

ただ、この決定について次のような過程を考慮しておきたい：即ち、

- What is that ? — It is a book.  
 Who is he ? — He is Mr. so and so.  
 Whose is that ? — It is father's.  
 What is he ? — He is a merchant.  
 Where is he ? — He is in the room.

これらの例によれば、文頭の疑問詞はすべて返答の中の補語と交替していることからみてそれが C としての要素であると考えられ、随って左欄の5例が C-V-S? の構文を示しているとするれば、No.35 の例は同様に C-V-S? の構文を示すようにみられるけれども、このような分析によってそれが簡単に結論されるものではない。例えば：

What is the matter ? において、一般に What が主語であると感じられているようであるが、これが従節中に発生する場合に、しばしば

'what is the matter' と 'what the matter is' が交互にみられるように what が S であるか the matter が S であるかは俄に断定し難い。

扱、A is B という構文において、A=B とみとめられる場合には、

Sweet, H. のように「主語と述語の結合は瞬時的に感じられるもので、この二つが殆んど同じ重要性を持つならば、どちらが主語であり、どちらが述語であるというのはあまり重要な問題ではない」<sup>4</sup> と云えよう。随って、どちらを主語ととってもよいのなら、文頭の語を S と考えることを原則とした方がよいかも知れない。

しかし、A is B の構文で A が S であるというのは、あくまで形式上そうであるにすぎないので、実質上は C-V-S の構文と感じられるものもあることはいうまでもない。

36) pe ær wæs his hlaford

37) and pæt lytle ǰetreowpa wæran mid mannum

上の2例は〔 〕内の発生である。

### 3-2 C-V-S型他：

38) Ac soð is pæt ic secǰe

39) and sop is pæt ic secǰe, . . .

40) hrædest is to cwepenne

41) and, hrædest is to cwepenne, mána and misdæda únǰerim ealra

42) And scandlic is to specenne pæt ǰeworden is to wide, and

eþeslice is to witanne pæt ...

以上の5例は、いずれも Mod. E. の 'It is ~ to. —' 又は、'It is ~ that —' の構文と類似の形式を示していることは明白であるが、すべて Mod. E. の所謂仮主語としての It に相当すべき3人称中性の代名詞 hit 乃至、指示代名詞の中性単数形 pæt が欠除している。

これは、仮主語 hit 又は pæt が省略されたために、C である夫々の形容詞の要素が前転位したものであるか — 或いは、しばしばいわれるように仮主語としての hit の発生がむしろ派生的な用法であるのかということは、更に十分な資料が得られたときに改めて考察してみたいと思うが、この段階では類推によるそのような結論なり判断を避けてただあるがままの要素についてその価値を区別しておきたいと思う。

次の例も同様の形式を示しているが、この場合 nýdpearf が果して主語であるかどうかは更に困難な問題である。上の5例を参照して micel を形容詞とみとめ C の前転位と考えておきたい：

43) and micel is nýdpearf manna þehwilcum pæt ...

44) and eac her syn on earde on mistlice wisan hlaforðswican maneþe

45) Her syndan mannslazan and mæþslazan and mæsserbanan and mynsterhatan, and her syndan mánsworan and morþorwyrhtan, and her syndan myltestran and bearnmyrðran and fule forleþene horinþas maneþe, and her syndan wiccan and wælcýrian, and her syndan ryperas and reaferas and worolstruderas, ...

上の2例は、副詞 her によって導かれる文であって、Mod. E. の 'Here

is ~, Here are ~' の形式の枠と完全に一致する構文のようであるが、文頭に位置する her は元来は強調による倒置のために前転位したものであるかも知れない。

尚、No.45 の例は、C-V-S/S/S/S//C-V-S/S//C-V-S/S/S//C-V-S/S//C-V-S/S/S と、同じ形式が5回重複している珍しい例である。

尚、次の例では 'her' の代りに副詞句が位置していることがみとめられる：

- 46) forþam on pýsan earde wæs, swa hit pincan mæz, nu fela zeara unrihta fela and tealte zetrywða æzhwær mid mannum

以上の8例は、すべて C-V-S の形式を示している。No.46 の例は [ ] 内の発生である。

- 47) oððon þa þe æt fulluhte ure forespecan wæran

この例は [ ] 内の発生であって、V が後位をとっている点に注意しておきたい。[S-C-V]

- 48) and ful micel hlaforðswice eac bið on worolde pæt...

この例文は、前の本節3-2の頭初の5例と全く類似の構文を示しているが、pæt 以下の clause を受ける主語 hit が欠けているように見える。しかしながら、次の例文を参照して *adv.* eac と V (bið) の間に指示代名詞男性単数主格 'se' (that) を挿入することが出来る。随って、これは C-(S)-V の形式を示す構文となる。

49) and ealra mæst hlaforðswice se bið on worolde pæt man his  
hlaforðes saule beswice

50) Nis eac nan wundor peah us mislimpe

この文には S が欠けているが、否定の副詞 ne と結合した動詞 beon の 3 pers. pres. sg. の複合形 'nis' が前位をとっているから、OE の構文では否定の副詞 ne が文頭に位置するときにはしばしば V が前転位してそれにつづく形式が最も普通であることからして、S 'hit' を Nis のあとに挿入して考えることが出来る。随って、この文は V-(S)-C の形式として挙げておきたい。

しかしながら、これはただこれまでに分析した資料から得られる推論であって、むしろこれは、Mod. E. を借りて表現するならば、'It is no wonder tha ——' の形式とするよりも、あるがままに → 'No wonder is that ——' の形式として捉える方が妥当であるかも知れない。

#### 4. 第3文型

##### 4-1 S-V-O 型:

51) hit nealæcð pam ende

52) ac dæðhwamlice man ihte yfel æfter oðrum

上文中の主語 man は、Mod. E. の 'they' 又は 'people' の意味に解される。

- 53) and we forhealdað æ3hwær 3odes 3erihhta ealles to 3elome
- 54) and pæs we habbað ealle purh 3odes yrre bysmor 3elome, 3e-  
cnaewe se pe cunne
- 55) and fela un3elimpa 3elimpð pysse peode oft and 3elome
- 56) Oft twe3en sæmæn, oððe pry hwilum, drifað pa drafe cristenra  
manna fram sæ to sæ, ut purh pas peode, 3eweledede to3ædere,  
us eallum to worold-scame
- 57) and oft tyne oððe twelfe, ælc æfter oprum, scendað to bysmore  
pæs pe3enes cwenan, and hwilum his dohtor oððe nydmazan, pær  
he on locað

この文では一つの V の目的語が3語重なって SVO/O/O の形を示している。

- 58) Ac (*we*) worhtan lust us to laze ealles to 3elome, and napor ne  
heoldan ne lare ne laze 3odes ne manna swa swa we scoldan

上文中 ( ) 内の主語 *we* はテキストの本文中には欠除しているが、脚註に補足してある。 *worhtan* が *pret. pl.* の形であり、後続の従節 *swa swa we scoldan* の中の主語が *we* であることから容易に補足して考えることが出来よう。次に、 *wyrcaþ lust* では 'lust' が *wyrcaþ* の目的語であるけれども二語で動詞句を成していると考えられるから、その目的語は *laze* である。随って、この一節は (S)VO//VO/O の形式となる。



59) ac mæst ælc swicode and oprum derede wordes and dæde

この文は、SV/OV の形式を示している。

60) and oft præl pæne pezen pe ær wæs his hlaford cnyt swype  
fæste and wyrcð him to præle purh 3odes yrre

この一節は、SO [SVC] V/VO の形式を示している。

#### 4-2 S-O-V, O-S-V 型 :

61) we him 3yldað sin3allice, and hy us hynað dæ3hwamlice

この一節には、SOV/SOV と同じ形式が二つ並列している。

62) and huru unrihtlice mæst ælc operne æftan heawep mid  
sceandlican onscytan, do mare, 3if he mæ3e

63) hu hy mid heora synnum swa oferlice swype 3od 3e3ræmedan  
pæt he let æt nyhstan En3la here heora eard 3ewinnan and Brytta  
du3epe fordon mid ealle

64) Ne bearh nu foroft 3esib 3esibban pe ma pe fremdan, ne fæder  
his bearne, ne hwilum bearn his a3enum fæder, ne bro3or oprum,  
ne ure æni3 his lif fadode swa swa he scolde, ne 3ehadode rezollice,  
ne læwede lahlice

この一節は、VSO/SO/SO/SO//SOV/S/S という形式を示している。文頭の *bearh* (*beorgan*, protect) は、否定の *ad. Ne* に伴って前転位をしていると考えられる。

以下の各例は、目的語の前位型 O-S-V 型を示しているものである：

65) and cristenes folces to fela man zesealde ut of pysan earde nu ealle hwile

66) wyrsan dæda we witan mid Enzlum ponne we mid Bryttan ahwar zehyrdan

67) and purh oferfylla and mæniʒfealde synna heora eard hy for-  
worhtan and selfe hy forwurdan

この例では OSV 型が重複して、OSV/OSV を示している。後者の目的語 *selfe* は再帰目的語である。

68) and ʒodsibbas and ʒodbearn to fela man forspilde wide ʒynd pas peode

この例は、O/OSV 型を示している。

69) Eadweard man forrædde and syððan acwealde and æfter pam forbærnde, [and Æpelred man dræfde ut of his earde].

[ ] 内は、テキスト I, E 及び C では欠除している箇所を示す。

この一節は、OSV/V/V (OSV) という形式を示しているが、二つの目的

語 O の前位は夫々明らかに強調による前転位とみとめられよう。

- 70) and us stalu and cwalu, stric and steorfa, orfcwealm and uncopu,  
hól and hete and rýpera reaflac derede swype pearle and unzylda  
swyðe zedrehtan

この一節は、OS/S/S/S/S/S/S/S/S/V//SV と一つの目的語に主語が10ヶ、  
動詞が2ヶ現われている。

#### 4-3 [SVO], [SOV] 型 :

- 71) forþam we witan ful zeorne pæt...

- 72) and flotmen swa stranze purh 3odes þafun3e pæt oft on 3efeohte  
an feseð tyne, and hwilum læs, hwilum ma, eal for urum synnum

- 73) and purh pæt þe man swa deð pæt man eal hyrweð pæt man  
scolde here3ian and to forð laðet pæt man scolde lufian

- 74) La hwæt, we witan ful zeorne pæt to miclan bryce sceal micel  
bót nyde and to miclan bryne wæter unlytel

上文中の *sceal* (*sculan* 3sg. *pres. ind.*) は, *ad. nyde* (*needs, necessarily*) を伴って他動詞の働きをしている。[SVO/SO]

- 75) Eac we witan zeorne hwær seo yrmð 3ewearð pæt fæder 3esealde

bearn wið weorpe, and bearn his modor, and bropor sealde operne  
fremdum to 3ewealde

この一節には〔SVO/SO/SVO〕と重複した形式がみられる。

以下はすべて〔SOV〕型の例である：

76) pam pe us scendað

77) pam pe his willan on worolde zewyrcað

78) 3if præl pæne pe3en fullice afylle, lic3e æ3ylde ealre his mæ3ðe

79) Understandað eac 3eorne pæt deofol pas peode nu fela 3eara  
dwelode to swype

80) and ealra mæst hlafordswice se bið on worolde pæt man his  
hlafordes saule beswice

81) and ful micel hlafordswice eac bið on worolde pæt man his  
hlaford of life forræde, oððon of lande lifiendne drife

この文中には〔SOV/V〕の形式がみられるが、従節中に並列した二つの節のうち後者では、その前にある節中の目的語 his hlaford を受けるべき代名詞が欠けているが、‘hine’を *conj.* oððon の次、of の前に補って考えることが出来る。

82) Ðeh præla hwylc hlaforde æthleape and of cristendome to wicin3e

weorpe

- 83) forpam to oft man mid hocere ƶóddæda hyrweð and godfyrhte lehtreð ealles to swype

この文中には〔SOV/OV〕の形式がみられる。次の2例も同じ形式を示している：

- 84) and micel is nydpearf manna ƶehwilcum pæt he ƶodes laƶe ƶyme heonanforð ƶeorne and ƶodes ƶerihta mid rihte ƶelæste

- 85) and swypost man tæleð and mid olle ƶeƶreteð ealles to ƶelome pa pe riht lufiað and ƶodes eƶe habbað be ænizum dæle

- 86) ƶif se peƶen pæne præl pe he ær ahte fullice afylle, ƶylde peƶenƶylde

この一節の ƶif clause では従節が二重に重なって〔SO (OSV) V〕という形式を示している。

- 87) purh pæt pe man sume men ær þam ƶeloƶode, swa man na ne scolde, ƶif man on ƶodes ƶriðe mæpe witan wolde

この一節の末尾には助動詞 wolde が入っていて〔SOV/SOVv〕の形式を示している。

- 88) swa swa man ƶodes peowum nu deð to wide, pær cristene

scoldan 3odes laze healdan and 3odes peowas 3riðian

この一節にも亦、助動詞 *scoldan* が入っていて [SOV/SvOV/OV] の形式を示している。この一節は、従節中に於ける動詞の後位という OE の語順におけるかなり一般的な原則に妥当するところの典型的な形式の例として注目しておきたい。

89) ac for idelan onscytan hy scamað pæt hy betan heora mis-dæda  
swa swa bec tæcan, 3elice pam dwæsan pe for heora prytan lewe  
nellað beor3an ær hy na ne ma3an, peh hy eal willan

上文中の *3elice ...* 以下 *beor3an* までの箇所は、*An Anglo-Saxon Dict., Supplement.* の 'læw, léw' の項に引用されているが、その訳文では (*through the disastrous effect of their pride ?*) となっている。即ち、*lewe* を *prytan* に修飾される名詞としているわけであるが、テキストの脚註によればこの *lewe* は極めて珍しい語で他のどこにも記録がない語であるとし、McIntosh の解釈に随ってこれを *beorgan* の直接目的語としているようである。<sup>5</sup> 筆者は後者の見解に従って引用することにした。随ってこの一節は [SVO/SOvV] の形式を示していることになる。

90) and py us is pearf micel pæt we us bepencan and wið 3od sylfne  
pin3ian 3eorne

上文中の *bepencan* は、テキストの註に従って再帰動詞とし *us* を再帰目的語とするのが妥当であろう。ただ、*An Anglo-saxon Dict.* の 'bepencan' の項目を参照すると次のような例があったので比較しておきたい：

ex. Ðá bepohte he hine (*then he bethought himself*)

但し、この場合 hine が us と同様に再帰目的語としてよいか、或いは単なる強調的な用法であるか俄に断定し難い。

91) and pæs us ne scamað na, ac us scamað swype pæt we bote  
azinnan swa swa bec tæcan

#### 4-4 S-O-v-V, [S-O-v-V] 型など:

92) and mid swype micelan earnunþan we þa bote motan æt 3ode  
3eræcan

93) we eac forþam habbað fela byrsta and bysmara 3ebiden

94) and we habbaað 3odes hus inne and ute clæne beryppte

上の2例は、Mod. E. の 'Have + p.p.' に相当する完了時制の形式を示し両者全く同様の語順になっている。(S-v-O-V)

95) and 3edwol3oda penan ne dear man misbeodan on ænize wisan  
mid hæpenum leodum

この例は OvSV の形式を示している。O の前転位は恐らく強調のためと考えられるが、否定の *ad. ne* との cohesion によって助動詞 *dear* が主語よりも前位をとっていることも見逃すわけにはゆかない。

- 96) and la, hu mæ3 mare scamu purh 3odes yrre mannum 3e-  
limpan ponne us deð 3elome for azenum 3ewyrhtum ?

この例は、修辞疑問 Rhetorical question とみとめられるが、助動詞 mæ3 の前転位は疑問文の形式として普通の語順を示しているといえよう。(v-S-O-V ?)

- 97) On hæpenum peodum ne dear man forhealdan lytel ne micel  
pæs pe 3elagod is to 3edwol3oda weorðun3e

この文中の pæs pe 以下の従節は主節の動詞 forhealdan の目的として挙げたい。助動詞 dear の前転位は *ad. ne* との cohesion による。(v-S-V-O)

- 98) and ne dear man 3ewanian on hæpenum peodum inne ne ute  
æni3 pæra pin3a pe 3edwol3odan broht bið and to lacum betæht bið

この一節の主節中にみられる形式は、v-S-V-O を示している。助動詞 dear の前転位は *ad. ne* との結びつきによるものとしてよいであろう。

以下の4例は従属節中の発生 [ ] である：

- 99) 3if we æni3e bote 3ebidan scylan [S-O-V-v]
- 100) 3if man pæt fyr sceal to ahte acwencan [S-O-v-V]
- 101) 3if we on eornost æni3e cupon ariht understandan [S-O-v-V]
- 102) Eala, micel ma3an mane3e 3yt hertoeacan eape bepencan pæs pe



an man ne mehte on hrædinȝe asmeaȝan

この例の O は関係代名詞の *pe* であって前位にあるのは当然のことである。ただ *ad. ne* と助動詞 *mehte* が固定的な相互の位置の関係を保ちながら主語の *man* のあとにつづいて中位をとっていることに注目したい。

[O-S-v-V]

次の3例は、Mod. E. の 'Let us——' の形式の枠に該当する：

103) and utan ȝod lufian and ȝodes laȝum fylȝean and ȝelæstan  
 swyȝe ȝeorne pæt pæt we behetan ȝa we fulluht underfenȝan

この例は v-O-V/O-V/V-O の形式を示しているが、末尾の O は接続詞 *pæt* に導かれる名詞節が主節の動詞 *ȝelæstan* の目的になっている。

104) and utan ȝelome understandan ȝone miclan dom ȝe we ealle to  
 sculon, and beorȝan us ȝeorne wið ȝone weallendan bryne helle  
 wites, and ȝearnian us ȝa mærpȝa and ȝa myrhða ȝe ȝod hæfð  
 ȝe-ȝearwod (v-V-O/V-O)

105) and utan word and weorc rihtlice fadian, and ure inȝeȝanc  
clænsian ȝeorne and að and wed wærlice healdan, and sume  
ȝetrywða habban us be-tweonan butan uncraeftan

この例は、v-O/O-V//O-V//O/O-V//O-V となって目的語が前位をとり主動詞が後位をとっている。上の3例 (Nos. 103, 104, 105) を比較すると、v-V-O 型と v-O-V 型が現われているが、果していずれが普通の文法的な語順形式であり、他が強調的乃至文体論的な選択による語順を示しているか

は俄に断じ難い。ただ Mod. E. の見地からいえば、v-V-O が文法的な形式であり、v-O-V 型は正常な語順を示していないのかも知れないと推測出来るだけである。更に資料が加えられた際に改めて検討すべき問題として保留しておきたい。

## 5. 第4文型, 第5文型

### 5-1 o-S-V-O 型など:

106) and us unwadera foroft weoldan unwæstma (o-S-V-O)

107) ac ealne þæne bysmor þe we oft poliað we zyldað mid weorð-  
scipe pam þe us scendað (O-S-V-o)

上の2例を比べると、o-O の位置が丁度反対になっているが、内容から判断して文頭の o : O は夫々強調のために前位をとっているとみても差支えなからう。

104") and utan... zeearnian us þa mærþa and þa myrhða þe 3od  
hæfð 3ezearwod

この例は前に前章で挙げた No. 104 の後半の部分を再び引用したものである。文中の us は再帰目的語であって、強調的な副詞とはとらない。随って、この一節は v-V-o-O/O の形式を示すことになる。

## 5-2 [S-V-O-C] 型:

108) pe læt hine sylfne rancne and ricne and zenoh Ʒodne ær pæt  
Ʒewurde [S-V-O-C/C/C]

63") hu hy mid heora synnum swa oferlice swype Ʒod ƷeƷræmedan  
pæt he let æt nyhstan EnƷla here heora eard Ʒewinnan and  
Brytta duƷepe fordon mid ealle [S-V-O-C/C]

上の2例とも Mod. E. の語順の形式と全く一致することに注目したい。

## 6. 受動態, その他

## 6-1 受動態:

109) And wydewan syndan fornydde on unriht to ceorle and to  
mæneƷe foryrmdde and Ʒehynede swype ; and earme men syndan  
sare beswicene and hreowlice besyrwde and ut of pysan earde  
wide Ʒesealde swype unforworhte fremdum to Ʒewealde

この一節は, 3つの節に分けられ計6ケの受動形がみられる。(S-v-V//S  
V/V//S-v-V/V/V)

97") On hæpenum peodum ne dear man forhealdan lytel ne micel  
pæs pe Ʒelazod is to ƷedwolƷoda weorðunƷe

この例は、前に 4—4 で挙げたものであるが、従節中に受動態がみられる。〔S-V-v〕

98") and ne dear man 3ewanian on hæpenum peodum inne ne ute æni3 pæra pin3a pe 3edwol3odan droht bið and to lacum betæht bið

この例も先に挙げたが、従節中に 2 つの受動態がみられる。〔S-O-V-v/V-v〕

110) and 3odes peowas syndan mæpe and munde 3ewelhwær bedælde

この場合には、間接目的語が主語になっているようで Poutsma: *Gram.* xlvii. § 32) の所謂 'Secondary passive conversion' の形式に相当するといえよう。即ち、第 4 型式の受動態である。(S-v-O/O-V)

111) Her syndan purh synleawa, swa hit pinčan mæ3, sare 3elewede to mane3e on earde (v-V-S)

112) mæni3e synd forsworene and swype forlo3ene, and wed synd tobrocene oft and 3elome

この例では二つの節に分れて 3 ケの受動態がみられる。(S-v-V/V//S-V)

113) ac wearð pes peod-scipe, swa hit pinčan mæ3, swype forsyn3od purh mæni3-fealde synna and purh fela misdæda (v-S-V)

Nos. 109~112 までに挙げた例では、受動態の助動詞はすべて *beon* (*be*) が用いられていたが、上文の例では *weorðan* が用いられていることに注目したい。

Periphrasis の受動形に用いられる二種の助動詞の間には *aspect* の差異があると云われる。 *bēon/wesan* は継続相 *durative* を現わし、 *weorðan* は完了相 *perfective* を表現するのに用いられると云う。<sup>6</sup>

しかし、このような観察は必ずしも一般的な規則として理解されるべきものではなく、両者の助動詞の選択には個人的な色彩が強く、時には *aspect* も無視されてかなり任意に用いられているようであるから、 *Wulfstan* の場合に果して上記の一般的な原則が妥当するかどうか即断するわけにはゆかない。もう一つ *weorðan* を用いた例があるので次に挙げておこう：

114) *ʒif hit sceal heonanforð ʒodiende weorðan* [S-v-V-v]

## 6-2 非人称代名詞 'man' による構文：

100") *ʒif man ƿæt fyr sceal to ahte acwencan*

52") *ac dæʒhwamlice man ihte yfel æfter oðrum*

68") *and ʒodsibbas and ʒodbearn to fela man forspilde wide ʒynd ƿas peode*

65") *and cristenes folces to fela man ʒesealde ut of pysan earde nu ealle hwile*

- 80") and ealra mæst hlaforðswice se bið on worolde þæt man his hlaforðes saule beswice
- 81") and ful micel hlaforðswice eac bið on worolde þæt man his hlaforð of life forræde, oððon of lande lifende drife
- 83") forþam to oft man mid hocere 3oddæda hyrweð and godfyrhte lehtreð ealles to swype
- 85") and swypost man tæleð and mid olle 3e3reteð ealles to 3elome þa þe riht lufiað and 3odes e3e habbað be ænizum dæle
- 88") swa swa man 3odes þeowum nu deð to wide, þær cristene scoldan 3odes la3e healdan and 3odes þeowas 3riðian
- 95") and 3edwol3oda þenan ne dear man misbeodan on æni3e wisan mid hæpenum leodum
- 97") On hæpenum þeodum ne dear man forhealdan lytel ne micel þæs þe 3elazod is to 3edwol3oda weorðun3e
- 98") and ne dear man 3ewanian on hæpenum þeodum inne ne ute æni3 þæra þin3a þe 3edwol3odan broht bið and to lacum betæht bið
- 69") Eadweard man forrædde and syððan acwealde and æðfter þam forbærnde, [and Æþelred man dræfde ut of his earde].

87") purh pæt pe man sume men ær pam zelozode, swa man na ne scolde, 3if man on 3odes 3riðe mæpe witan wolde

73") and purh pæt pe man swa deð pæt man eal hyrweð pæt man scolde heregian and to forð laðet pæt man scolde lufian

OE には、前節 6-1 で挙げたような *periphrasis* の形式による受動の構文のほかに、非人称代名詞 *man* を用いて受動の内容を表現する形式が多い。上に挙げた例はすべて *man* を主語とする構文の形式であるが、そのすべてが果して受動の内容を示しているものかどうか改めて検討する必要がある。ここでは、OE に特徴的なこのような構文の例として参照の便宜のために特に分類して挙げておくにとどめたい。

### 6-3 非人称構文：

33") and py us is pearf micel pæt we us bepencan and wið 3od sylfne pinzian 3eorne

この例の場合に、主節に主語が欠けているのは文頭の *ad. py* によって代用されているものか、或いは *us* によって除外されたものか——いずれにしてもこの形式は Mod. E. の文法の見地からは分類できない構文であって、簡単に *pæt clause* を代表する形式上の主語 *hit* が省略されたものであるなどと断定したり推測するわけにはいかない。むしろあるがままの構文として分類すべきものであろうが、それに対応すべき Mod. E. の構文の枠はないのだから OE に特徴的な非人称構文の一種としてみとめざるを得ないわけである。

91") and pæs us ne scamað na, ac us scamað swype pæt we bote  
azinnan swa swa bec tæcan

この場合の主節に於ける形式は前の例と殆んど類似の形式の枠を示しているが、この例の scamað は非人称動詞として、主語の代りに人称代名詞の対格 *acc. us* をとっているので一層理解し易いけれども、この構文を Mod. E. の構文の枠に組入れることは出来ない。

この例によって、前の No. 33" の例に於ける主節の *us is* の関係はかなり判然としてきたといえる。

96") and la, hu mæz mare scamu purh 3odes yrre mannum 3elimpan  
ponne us deð 3elome for a3enum 3ewyrhtum ?

この例の従節中の *us deð* も、主節の主語 *scamu* の反復をわざとさけて省略したものとみとめられるが、この関係は前の二つの例を参照することによって更に一層良く理解出来るかも知れない。

70") and us stalu and cwalu, stric and steorfa, orfcwealm and uncopu,  
hól and hete and rýpera reaflac derede swype pearle and unzylða  
swyðe 3edrehtan

この例は、先に S-V-O 型式の例として挙げたのであるが、むしろ OE の特徴的な構文としての非人称構文の例として挙げた方がよいかも知れない。それは、上の二、三の例を参照することによって一層明白な形式上の特徴を示してきたからである。

115) Forþam hit is on us eallum swutol and 3esene pæt we ær



pysan oftor bræcan þonne we bettan, and þy is pysse peode fela  
onsæþe

この例の従節中の and þy is... 以下の文には主語がない。それは、この章6-2の頭初に挙げた No. 33" の例を参照すれば、文頭の *ad. þy* によって主語が排除されたとも考えられるが、或いは is のあとにつづく *pysse peode* が主語であるようにも考えられよう。しかしながら、末尾の *onsæþe* は、テキストの註によっても、又 *An Anglo-Saxon Dict.* を参照しても、品詞は形容詞 *a. assailing, attacking* となっており→随って、*onsæþe* は動詞 *is* の補語になるわけでこれが現在分詞として働いて *pysse peode* を目的語としてとるものとみとめて良いであろう。þeod (people, nation) を修飾する指示代名詞 *pysse (f. dat. sg.)* の形態からみても *pysse peode* は *onsæþe* の目的語でなければならない。随って、この一節はやはり非人称構文として考えるのが妥当であろう。

## 7. まとめと結論

以上挙げた例について、それを統計的に分類し更にこのテキストにみられる文構成上の特徴的な分布の形式に就いて考察してみたい。

### 7-1 各型式のまとめ：

#### 1) 第1文型：

| 形 式   | 例 数 | Nos.   | 註                   |
|-------|-----|--------|---------------------|
| S V   | 5   | 1~4, 6 |                     |
| V S   | 2   | 5, 7   | <i>ad. ne</i> による導入 |
| [S V] | 10  | 8~17   |                     |
| [V S] | 1   | 17"    |                     |

|        |   |    |                      |
|--------|---|----|----------------------|
| SvV    | 1 | 18 |                      |
| vSV    | 1 | 19 | <i>ad. ponne</i> が文頭 |
| SVv    | 1 | 20 |                      |
| [SV-v] | 1 | 21 |                      |

2) 第2文型：

| 形 式   | 例 数 | Nos.      | 註   |
|-------|-----|-----------|---|
| SVC   | 12  | 22~32, 34 |   |
| (S)VC | 1   | 33        |   |
| SVC ? | 1   | 35        |   |
| V(S)C | 1   | 50        | 文頭は Nis                                     |
| [SVC] | 2   | 36, 37    |   |
| [SCV] | 1   | 47        |   |
| CVS   | 8   | 38~45     | 'Here is (are) —'<br>の形式 2 例(44, 45)<br>を含む |
| [CVS] | 1   | 46        |   |
| CSV   | 1   | 49        |   |
| C(S)V | 1   | 48        |   |

3) 第3文型：

| 形 式   | 例 数 | Nos.          | 註                 |
|-------|-----|---------------|-------------------|
| SVO   | 9   | 51~59         |                   |
| SOV   | 4   | 60~63         |                   |
| VSO   | 1   | 64            | 文頭は <i>ad. Ne</i> |
| OSV   | 6   | 65~70         |                   |
| [SVO] | 5   | 71~75, 89     |                   |
| [SOV] | 15  | 76~88, 90, 91 |                   |

|                |   |          |                       |
|----------------|---|----------|-----------------------|
| SOvV           | 1 | 92       |                       |
| SvOV           | 2 | 93, 94   |                       |
| OvSV           | 1 | 95       |                       |
| vSOV?          | 1 | 96       |                       |
| vSVO           | 2 | 97, 98   | <i>ad. ne</i> が v に先行 |
| [SOVv]         | 1 | 99       |                       |
| [SOvV]         | 2 | 100, 101 |                       |
| [OSvV]         | 1 | 102      | O = <i>rel. pron.</i> |
| (S)vOV         | 1 | 103, 105 | 'Let us—' の構文         |
| (S)vVO<br>vの前に | 1 | 104      | //                    |

## 4) 第4文型, 第5文型:

| 形 式     | 例 数 | Nos.      | 註                                  |
|---------|-----|-----------|------------------------------------|
| oSVO    | 1   | 106       |                                    |
| OSVo    | 1   | 107       |                                    |
| (S)vVoO | 1   | 104''     | utan ( <i>Let us</i> )...<br>で始まる文 |
| SVOC    | 2   | 108, 63'' |                                    |

## 5) 受動態 (periphrasis):

| 形 式    | 例 数 | Nos.     | 註      |
|--------|-----|----------|--------|
| SvV    | 2   | 109, 112 |        |
| [SVv]  | 1   | 97''     |        |
| vSV    | 1   | 113      |        |
| [SvVv] | 1   | 114      | 未来の受動形 |
| SOVv   | 1   | 98''     |        |
| SvOV   | 1   | 110      |        |

## 7-2 統計上にみられる問題点：

テキストの中からとり上げた 115 例について、そのうち分類不可能のもの 2 例 (Nos. 111, 115) を除外し、重複する文例と合わせて延べ 116 例を分類した結果は、統計一覧表として前節に挙げたが、ここで統計に現われた語順の形式上の問題について考えてみたい。

① 先ず第 1 文型では、S-V 形式が多いことに注目しなければならぬ。即ち、主節にみられる SV 型は 5 例、従節中にみられる [S-V] 型は 10 例、合わせて 15 例が Mod. E. の構文と全く一致する点を注目したい。これによって、助動詞を含まぬ形式では S-V 型が支配的な語順であることが推定出来るようである。この形式にあてはまらぬ V-S 型 3 例中の 2 例は *ad. ne* によって導入された文であるから、明白な理由による倒置 *inversion* として差支えない筈である。

ただ、この型式に助動詞 *v* が入ってきたときに、文例がわずか 4 例にとどまり、一つ一つ別個の形式を示しているので、何ら支配的な語順の形式が捉えられぬのが残念である。

② 次に第 2 型式では、S-V-C 形式が最も多い点に注目したい。即ち、主節中の S-V-C 型 12 例と従節中の [SVC] 型 2 例と合わせて 14 例が、Mod. E. のそれと対応する形式を示している。

次に注目しなければならぬ点は、主節中に現われた C-V-S 型が 8 例を示していることである。これらの 8 例に現われた文頭の C は、Mod. E. の所謂形式上の主語に相当する *hit* の用法が未だ十分習慣的に確立されていないために、その位置を述部の補語が占めているのかも知れないが、そのことを明らかに分析するためには、この形式について歴史的にもう少しさかのぼってつきとめなければ十分な結果は得られないかも知れない。随って、このこ

とはこの作品に於いてだけで解決される問題ではなくて、更に他の作品について豊富に文例を求め、結局形式上の主語 hit の歴史的な源泉を追求しなければならぬ。ただ、C-V-S 型 8 例中、Mod. E. の 'Here is(are)——' 形式の枠に相当する例が 2 例あることは興味深いことである。

③ 第 3 型式について、先ず助動詞 v を含まぬ例文についてみると、S-V-O 型が多いことに気がつく。主節中に現われる SVO 型が 9 例、従節中にみられる〔SVO〕型が 5 例で合わせて 14 例が、Mod. E. の固定的な形式と一致する。

しかし、これに反して従節中にみられる〔SOV〕型が 15 例の多数を示していることに注目しなければならぬ。すでに度々指摘したが、OE の構文の形式に於いては、従節中に於ける動詞の後位が特徴的な語順の形式であって、しばしば動詞の後位が従属節の目じるしにさえなっている。

斯うして、この作品に於ても一般に云われているこの原則がかなり明瞭な事実となって現われたことになる。

そして、この点に關聯して、主節中にも動詞の後位型がかなり多いことに注目しておきたい。即ち、S-O-V 型 4 例と、O-S-V 型 6 例の計 10 例にみられる V の後位が →〔SOV〕の形式に何らかの歴史的な背景を与えているものかどうか興味深い問題を提供しているように考えられるのである。

次に、助動詞が入ってくる第 3 型式では Mod. E. の SvVO 型の固定的な形式に一致する文例が一つも見当たらない点を注目しておきたい。即ち、13 例が夫々全く別個の形式を示しているので何ら支配的な形式なり法則を見出すことは不可能である。ただ、この形式のなかで、v : V の相対的な位置の關係をみると、v-V 型即ち、助動詞 v が前位をとり易く、主動詞 V が後位に固定し易い傾向を示していることをみとめたいと思う。

④ 第 4 型では例文が極めて少い上に、その 3 例が夫々別個の形式を示して

いるのでただ統計上の資料として挙げるだけで、何ら形式上の法則をみつけられぬが、仔細に検討してみると、oSVO, OSVo の2例の夫々文頭の o, O は強調による倒置の形式であると考えられるので→むしろ、(S)vVoO の形式が普通の語順ではないかと推測しておきたい。

第5型式の2例は、全く Mod. E. の形式と一致する点に注目したい。

(5) 受動態の形式では、7例が殆んど別個の語順を示しているので、今はそれに就いての見解をさけて資料として挙げるにとどめておきたい。

### 7-3 結論：

OE 文学に於ける syntax の構造はかなり自由な変異の幅を示しているが、その多様な変異のなかから基準的な分布の法則を引出すことはなかなか困難な問題である。

OE の構造上の分布の特徴を明らかにし、その体系的な syntax の記述を意図する調査の初期の段階に於いて、*Sermo* をとりあげるのは、OE 文学中最も豊富な資料を蔵している方言は West-Saxon 方言であり、そして特に、Late West-Saxon の記録は Ælfric (Grammarian) と Wulfstan の諸著作の中にその最も純粋な形が代表されていると云われているからである。

この作品に現われた syntax のレベルに於ける主要な分布上の特徴をとり上げてその問題点を明らかにし、今後次第に他の作品に調査を進めてゆく際の根拠となるような資料を整えておきたい。

#### ① Mod. E. の構文と一致する語順の形式：

各型式についてみると、第1型・第2型・第5型の各文型の例文の中で特に Mod. E. の形式に対応する分布が多い。第1型式では、一致する形式

S-V 型 5 例, [SV] 型 10 例, SvV 型 1 例の計 16 例に対してそれ以外の形式が 6 例みられる。第 2 型式では, S-V-C 型 12 例, [S-V-C] 型 2 例, SVC? 1 例, 'Here is (are)' の構文と対応する形式 2 例——計 17 例みとめられる。第 3 型式では, S-V-O 型 9 例, [SVO] 型 5 例の計 14 例, 第 5 型式で 2 例が Mod. E. の構文の形式と完全に一致する語順を示している。

しかし, 以上合計して 49 例にすぎず, 全体の 116 例中の比率は  $\frac{1}{2}$  にも達しない。即ち, この作品に於いて未だ固定しない語順の形式がかなり多いことを見逃してはならない。——これは, Mod. E. の構造にみられるような固定的な分布の形式が未だ完成した習慣として確立していない過程を示しているものか, 或いはここにみられるあまりにも多い変異の形式は作者特有の修辭的特性 (乃至, 文体) を示しているものであるかどうかという点については今後更に Wulfstan の他の作品や同時代の他の作者について分析し調査を拡げてから結論を出したい。

② 従節中の動詞の後位の特徴がかなり保存されていること:

しばしば指摘されているように, OE では動詞の後位の特徴——特に従節中の動詞後位の形式が多く残っていると云われているが, この作品のなかで特にこのことが注目されるのは第 3 型式の [SOV] 型 15 例である。第 3 型式では他に [SOVv] の 1 例を含めて, 主節・従節中の動詞 V の後位を示すものが 20 例もあり——結局, この型式のなかで動詞の後位を示すものは 35 例になる。但し, この主節中の V の後位の形式は, 従節中の動詞の後位という特徴に歴史的なつながりの背景をなしているものかどうかは興味のある問題と云えよう。

③ 助動詞 v が入る periphrasis の構文では, 特に語順の形式が一定しない:

第 1 型式・第 3 型式・受動態の形式の中で特に目立つ現象のようである。

## ④ 受動態と完了時制の構文の形式がかなり多く発見されること：

Periphrasis による受動態は 8 例であった。そのなかには No. 109 の例に於けるように受動態が 6 回重複するような例がある。

完了時制は、'habban+p.p.' の形式が 3 例 (Nos. 93, 94, 104), 'bēon+p.p.' の形式が 2 例 (Nos. 21, 42) みられた。尚、これらの形式によらないで完了などの aspect を表現しているとみられる例が一、二あった (Nos. 24, 51) が、aspect の問題については別に論ずることにしたい。

## ⑤ 非人称代名詞 man を主語 S とする構文が多いこと：

この形式はすでに挙げたように 15 例あったが、特に Nos. 87", 73" では 3 回・4 回と重複している点に注目したい。この形式は、この時代の修辭的乃至文体的特性を示すものかどうか興味のある現象であるが、特にこの形式が periphrasis の受動態との表現の相違についてはもう少し資料を集めた上で分析してゆかなければならぬ。

## ⑥ Mod. E. の非人称構文の 'it' に相当する 'hit' 或いは 'se' の用例について：

Mod. E. の 'it' に相当する hit の用例は Nos. 5, 20, 21, 24, 25, 51, 114 などにみられるが、No. 29 にみられる pæt もそれらと同じ用法を示している。

又、'hit—pæt...' の構文を示すものは Nos. 6, 31, 32 にみられるが、これらは Mod. E. の 'It—that...' の構文と完全に一致する形式と言ってよいであろう。但し、No. 80 の例では hit が se になっていること、又 No. 30 では 'pæt—pæt...' となっているので、この作品の中で Mod. E. の 'it' に対応する代名詞は hit, se, pæt の 3 語があるので、これらを自由変形 FV として考えたい。syntax や (morpho-)phoneme のレベルでみられる OE のかなり大きな自由変異 FV の幅は、形態素のレベルにもその特徴を示し



ていると言って良いであろう。

⑦ 非人称動詞による構文について：

No. 50 Nis eac nan wundor peah us mislimpe

この複文をみると、主節にも従節にも夫々の動詞に対して主語 S が欠けている。主節では、その動詞 *nis* が *anom. v. bēon* の 3 *pers. sg. is* に否定の *ad. ne* が結合した形であることから、文頭の *Nis* の次に S 'hit' を補足することが出来る。又、従節では S はないけれども非人称動詞 *mislimpan* (*impers. v. w. dat.*) の目的語 *us* によってその内容を十分に把握することが出来るわけである。

しかし、Mod. E. の構文と全く類似点を持たないような異質のこれらの非人称動詞による構文を、Mod. E. の構文の形式に強いて組入れることは不合理なことといわねばならぬが、Mod. E. の構文の形式に並行するように参照してゆく時に、この構文は—→① (S)Vo/O の形式に組入れてよいか、②この形式に現われる *dat.* 乃至は *acc.* の o/O は、再帰目的語であるよりも—→むしろ、純粹に強調的な副詞的用法を示しているのではないかという疑問につきあたる。

No. 70 *us* ... *dere*

No. 106 *us* ... *weoldan*

No. 96 *ponne us deð*

この3例にみられる *us* は夫々非人称動詞の目的語として理解出来るが、

No. 104 *utan 3eearnian us*

に於ける *us* が間接目的語の用法を示している例と比較すると、特に No. 70 の場合にはこの *us* が *dere* の直接目的語であるか、或いは先に主語 S として挙げたこの文中の名詞が直接目的語であって、*us* は間接目的語であるか極めて曖昧になってくる。随って、非人称動詞によるこのような構文の場合には強いて Mod. E. の構文のカテゴリーに組入れようとせず、OE の

あるがままの形式として認識しそれを分類する方向を求めるべきであるかも知れない。

No. 91    *pæs us ne scamað na, ac us scamað swype pæt...*

この場合の *us* は、前の No. 50 の例の従節中の *us* と同様に非人称動詞 *scamian* の目的語であるが、Mod. E. の見地からいえば、その形は *acc.* であるがその表現する内容からみて事実上の主語と違って差支えない性質のものであり、或いは *scamian* の目的語であるというよりも *to us (for us)* の内容を示す副詞的用法を示しているとみとめることが出来る。

次の場合を参照してみよう：

No. 90    *and py us is pearf micel pæt we us bepencan*

この場合に、従節中の *us bepencan* の *us* は動詞 *bepencan* の再帰目的語であるが、主節中の *us* は普通には副詞的用法と考えられる。後者の場合（主節中の *us*）には、前節⑥に挙げた例と比較すれば当然主語 *hit* があるべき位置に *us* があるのだから、（上に挙げた Nos. 50, 91 の夫々の *us* と同じく）非人称の形式上の仮主語 *hit* の代りに人称代名詞 *us* が用いられていると考えられよう。このような場合の *us* は非人称構文の形式ではないが、OE に多くみとめられる所謂非人称構文の主語 *hit* と密接なつながりを持っているようである。随って、ここで問題となるのは上に挙げた No. 90 の例に於ける二つの *us* について、それらが果して同じ機能を示しているものであるかどうか、即ち、*1 pers. pl. acc.* 乃至 *dat. 'us'* が OE の非人称構文の形式の中で果している機能の歴史的な過程を明らかにして *us* と *hit* の相関的な機能を詳しく調査することである。

以上 *Sermo Lupi* に於ける特徴的な分布の形式に就いて、その主要な問題点を取り上げて小論を試みたのであるが、わずかに *Wulfstan* の特徴的な一、二の分布形式について明らかにした点を得ただけにとどまり、多くの重要な問題について十分な分析が出来ないで残しておくことを残念に思う。ただ残された多くの問題については、*Wulfstan* の他の多くの作品を詳細に調

査して改めて十分に論ずる機会を持つことを期したい。

〔註〕

1. 次の三例を参照されたい：

① Anderson, George K. *The Literature of the Anglo-Saxon*, p. 41.

② Alston, R. C. *An Introduction to Old English*, p. 4.

③ Chadwick, H. M. *The Study of Anglo-Saxon*, p. 47.

2. 次の三例に同様の見解がみられるので参照されたい：

① Sweet, H. *Anglo-Saxon Primer*, p. 1.

② Brook, G. L. *An Introduction to Old English*, p. 5.

③ Alston, R. C. *Op. cit.*, p. 4.

3. ① Anderson, George K. *Op. cit.*, p. 341.

② Whitelock, D. *Sermo Lupi ad Anglos*, p. 6.

4. Sweet, H. *A New English Grammar*, Part 1, § 46.

5. Whitelock, D. *Op. cit.*, p. 63, fn. 164.

6. ① Quirk, R. & Wrenn, C. L. *An Old English Grammar*, p. 80.

② Alston, R. C. *Op. cit.*, p. 67.